

第十四章

「ピーター・キャット」と

T・S・エリオット

——猫（その3）

「『猫に名前をつけるのはむずかしいことです』というT・S・エリオットの有名な詩があるけど、知ってますか？」

村上春樹の『サラダ好きのライオン——村上ラヂオ3』（二〇一二年）の中に、そんな言葉で始まるエッセーがある。その詩の中でエリオットは「猫は三つの名前を持たなくてはならぬ」と主張している。

三つの名とはまず「普段呼ばれる簡単な名前」。「『たま』とかね」と村上春樹は言う。もう一つは「猫たるものひとつは持つべき、よそ行き気取った名前」。さらに一つは「その猫

自身しか知らない秘密の名前」だ。

村上春樹は大学時代、夜アルバイトから戻る途中に子猫を見つけ、その猫を呼ぶと聞いてきた。最初は無名だったが、ある日ラジオを聴いていたら、飼い猫が行方不明となった人がいて、その猫の名がピーターだった。「じゃあ、ピーターでいいか」となったという。

猫に名前をつけていくことが大切な意味をもっていることを本書の中で紹介してきたが、その村上春樹は二十五歳の時に東京・国分寺にジャズ喫茶「ピーター・キャット」を開店。その店名は愛猫ピーターが由来だと思われる。

▽猫のピーターのこと

T・S・エリオットはノーベル文学賞を受けた著名な英国詩人（生まれは米国）だが、村上春樹は、そのエリオットの詩が好きなのか、エッセーで何度も繰り返し紹介している。『村

上朝日堂はいかにして鍛えられたか』（一九九七年）の「インカの底なし井戸」というエッセーの冒頭は「『猫に名前をつけるのはむずかしい』というのはT・S・エリオットの有名な言葉だが」と書き出されているし、『うずまき猫のみつけかた』（一九九六年）の最後に置かれた「猫のピーターのこと、地震のこと、時は休みなく流れる」という文は「猫に名前をつけるというのは、英国の先人も述べておられたとおり、なかなかむずかしいものである」と書き出されているのだ。

自らが育った地を襲った阪神大震災の後、まもなくして書かれたエッセーだが、その題名の中で「地震のこと」と並べて「猫のピーターのこと」と記すことから、「ピーター」がどれほど大切な意味を持っているかがわかる。これまで紹介してきた「いわし」「サワラ」「トロ」……などの猫への名づけのこだわりは、こ

のエリオットの詩に発しているのかもしれないと思えるほどのこだわりである。

▽最初に挙げた名前

注目すべきはT・S・エリオットの詩そのものと、「ピーター」との関係である。

ヒットミュージカル『キャッツ』の原作ともなったT・S・エリオットの『キャッツ——ポッサムおじさんの猫とつき合う法』（一九三九年。池田雅之・訳、一九九五年）を読むと、村上春樹が猫の「普段呼ばれる簡単な名前」として『「たま」とかね」と記す部分に、エリオットは猫名候補として「ピーター、オーガスタス、アロンゾ」などを挙げている。つまり村上春樹が開いた喫茶店名は「ピーター・キャット」。普段呼ばれる猫の名として最初にエリオットが挙げたのが「ピーター」なのだ。

「ピーター・キャット」の店のマッチにはル

イス・キャロル『不思議の国のアリス』に出てくるチェシヤ猫の絵が描かれていた。それは、にやにや笑い、人語を話す猫。村上春樹の長編に『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（一九八五年）もあるので「不思議の国（ワンダーランド）のアリス」との関係ももちろんあるだろう。

また『海辺のカフカ』（二〇〇二年）で「きみはなかなか有名なんだよ。ホシノちゃん」と黒猫の「トロ」が「星野青年」に話しかける場面、黒猫の「トロ」は「一瞬にやつと笑った。猫が笑うのを目にしたのはそれが初めてだった」と記されている。ここにも『不思議の国のアリス』の、にやにや笑い、人語を話すチェシヤ猫の姿が反映していると思われる。

▽うつろな人間たち

だが、「トロ」という黒猫は、T・S・エリ

オットの詩にも関係しているのだ。

『海辺のカフカ』には十五歳の「僕」に向かって、甲村記念図書館の「大島さん」が、T・S・エリオットの詩について話す場面がある。一方的に自分たちの価値観のみを善として、他者にその価値観を押しつけてくるような来館者に対して、「大島さん」は、こう語る。

うんざりさせられる人たちは、そういう「想像力を欠いた人々だ。T・S・エリオットの言う〈うつろな人間たち〉だ。その想像力の欠如した部分を、うつろな部分を、無感覚な藁くずで埋めて塞いでいるくせに、自分ではそのことに気づかないで表を歩きまわっている人間だ。そしてその無感覚さを、空疎な言葉を並べて、他人に無理に押しつけようとする人間だ。つまり早い話、さっきの二人組のような人間のことだよ」と「僕」に言うのだ。

村上春樹作品では、あまりない激しい言葉遣